
有能な私

灯城 凜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

有能な私

【Nコード】

N6585C

【作者名】

灯城 凜

【あらすじ】

ごく普通の女子高生「伊藤華菜^{いとうかな}」は、ある日夜の街で出会った男にモデルにならないかとスカウトされる。そして男について行った華菜を待ち受けていた試練とは…！？

第1話 スカウト（前書き）

小説の更新は、不定期ですのであらかじめご了承ください。

第1話 スカウト

『おはようー!! 華菜!!』

『おはよう...』

いつもと同じ日常...いつもと変わらないことが、今日も始まると私は思っていた...

私の名前は、

「伊藤 華菜^{いとう かな}」ごく普通の公立の学校に通う高校1年生。

そんな私は、今日初めて寄り道をした。

私は、吹奏楽部に入っていていつも帰りが遅く夜9時をすぎることが多かった。

だからずつと行ってみたいと思っていた夜の街には、行きたくてもいつも行けずにいた。そしてそんな思いが、抑えきれなくなつて今日初めて行ってみることにした。

夜9時というのに夜の街は、賑やかで人通りも多かった。

そんな中私は、1人の男に声をかけられた。

『君かわいいね!! もしかしてモデルさん?』と男は聞いてきた。

こんなごく普通の女子高生の私が、モデルさんなわけないじゃない...と思いながら私は

「違います...」と答えた。

すると男は『そうなんだ...君みたいな素敵な人がもつたいない...もしよかったらモデルさんになつてみない?』と言ってきた。

そして男は、胸ポケットから名刺を取り出して私に渡した。

そこには『加藤^{かとう} 雄二^{ゆうじ}有能プロダクション』と書かれていた。

それを見て私は、悪い気がしなかったので半信半疑だったけど男について行った。

まさかあんなことになるなんて思いもせず...

第2話に続く↓

第1話 スカウト（後書き）

「有能な私」いかがだったでしょうか？これからも頑張りますので
よろしく願いします！！

第2話 奪われた自由（前書き）

小説の更新は、不定期ですのであらかじめご了承ください。

第2話 奪われた自由

男に言われたままついて行き私は、夜の街をぬけていくつも細い道を通って来た。

少し不気味で怖かったけど1人というわけでは、なかったので黙って男のすぐ隣を歩いてついて行つた。十五分ぐらい歩くと灯りのともった小さな五階建ての建物に着いた。

男は、私を一階の椅子をひとつだけ置いてある部屋に招き入れた。

一階には、もうひとつ部屋があるみたいだけどそこはふすまで仕切られていて何があるのかわからなかった。それから男は、私に少し待っておくように言つて部屋を出ていった。

しばらくすると男は、二人の男を連れて来た。そして一階の部屋のふすまをあけた。

するとそこには、少し大きめのベットがひとつと柱と小さなダンスがあつた。

私は、思わず鳥肌がたつた…。

「まさか私は、今からこの人たちに犯されるんじゃない…」そんな考えが浮かび私は逃げようとした。が、それより早く男たちに手と足を縛られてベットへと連れていかれた。

私は、必死に抵抗したが努力のかいもむなく男たちの手によって服や下着を全て脱がされたのだつた…。

私は、泣きながら必死に男たちに訴えた。

「お願い…やめて…こんなの恥ずかしい…」と言つた。

すると男たちは、笑いながら私に『君…もしかして処女?』と聞いてきた。

そして私は、怖かつたので

「はい…処女です…」とその質問に素直に答えた。

そしてこれから予想以上の地獄が待ち受けていたのだつた…。

第3話に続く
↓

第2話 奪われた自由（後書き）

もしよろしければ感想などいただけると光栄です。

第3話 汚された天使（前書き）

小説の更新は、不定期ですのであらかじめご了承ください。

第3話 汚された天使

男たちは、私にした質問の答えを聞いてとてもうれしそうにした。そしていきなり私の足を縛っていた縄をほどき脚をおもいきり開かせて私のおま〇こを二人してじっと見た。

私は

「恥ずかしい…！見ないで…！」と言って脚を閉じようとしたが脚を男たちに抑えられて脚を閉じれなくされた。

そして男たちは、私のおま〇こを見て『キレイだ…』と言った。すると、次の瞬間男たちはズボンをおろし私の顔の前に自分たちの反りたったペニスを持ってきた。

そして私は、男の人のモノを初めて見て興奮した。

すると私は、無意識のうちにペニスを握ったり口に含んだりしていた。

そしてそのうち1人の男は、『うつ…！』と言って私の口の中ではてた。

私は、初めて男の人の精液を飲んだ。

精液は、トロツとしていてすごく熱くてとてもおいしかった。だから私は、ついつい精液の虜になってしまったのだった。

そして私は、男たちに精液を顔にかけられたり口の中にだされたりとどんどん汚れていくのだった…。

でも私は、次第にイヤという感情を忘れただ快楽に溺れて行くのだった…。

こんなことを思ったことなんて今まで一度もなかったのに今の私は、まるでさっきまでとは別人のただ欲望のままに動くメスブタのようだった。

それは、本当にさっきまで誰にも触れられたことのない汚れを知らない天使のような純粋な少女だったとは思えない姿だった。

最初は、イヤだったのに今は体の熱を冷ましたい…ただセックスを

したいという考えしか華菜の頭には、なかった…。

そして彼女自身もこんなふうになってしまったことは、今までなかったのどうしていいかわからずにとだ男の体を求めていたのだった。

そして私は、そんな淫らで汚されていく行為にどんどん自分の理性を壊していったのだった…。

第4話に続く↓

第3話 汚された天使（後書き）

もしよろしければ感想などいただけると光栄です。

第4話 処女喪失（前書き）

小説の更新は、不定期ですのであらかじめご了承ください。

第4話 処女喪失

そして私は、とうとう我慢できなくなり言っではならないことを言っ
てしまった。

「……来て」

そういうと男たちは、目を輝かせて私にこう言った。

『来てってどういうことだ…？ちゃんと説明してもらわないとどう
して欲しいのかわからないなあ…』

それを聞いて私は、とても恥ずかしくなって涙目で必死に訴えた。

「そんなこと言わせないで…本当は、どういうことかわかってるで
しょ…？お願い…いじめないで…早く来て…」

そういうと男たちは、うれしそうに

『さあ…なんのことかな？ちゃんと言わないんならしてあげない
けどそれでもいいんだな？』

と言い大きくなった自分のペニスをズボンをあげてさっさとなおし
はじめた。

それを見て私は、焦って思わず

「イヤ…！！なおさないで！！早く私のいやらしいおま〇こにあな
たたちの太くて大きなおち〇ちんを入れてください！！」と言って
しまった。

それを聞いて男たちはまるで狼のようにいっせいに私に飛びついて
きた。

そしてみんなで私の体中を愛撫し初めた。

舌を使って胸の周辺やおま〇この周辺を円を描くようにスーッと舐
められて思わず私は、あえぎ声をあげてしまった。

「ひゃんっ…！！んっ…あんっ…ダメ！！アソコがヒクヒクするの
…熱いのいっぱい溢れてて恥ずかしいよお…！！」と言った。

すると男の一人が、耐えられなくなったらしく勢いよく私のおま〇
こに自分のモノをおもいつきり押し込んだ。

そして私は、思わず泣きながら体を弓なりに反らせて

「痛い！！熱いよぉ……！！あっ……んっ……イヤ……！！もつと優しくして……！」と叫んだ。が、その声は、男に届くことなく男は私におもいきり自分のモノをパンパンと挿入するのだった。

そして私は、次第にその痛みになれ快感に酔いしれていった。

「んっ……あっ……いい……気持ちいい……イクッ……！！」と私が、言うと同時に男のペニスが私のおま○ここに突き刺さったままドクンツドクンツと脈を打った。

すると熱いものが、いつきに私の中に入ってきて私はびっくりして「熱い！！んっ……あっ……こんなにいっぱい精液が入ってきてちゃ私妊娠しちゃう……！！」と言った。

そして私は、快感のあまりに気絶してしまい男と一緒ににはてるのだった……。

また男と一緒ににはてたあとの私のおま○ここからは、大量の血と精液が溢れでていたのだった。

第5話に続く↓

第4話 処女喪失（後書き）

もしよろしければ、感想などいただけると光栄です。

第5話 疑問（前書き）

小説の更新は、不定期ですのであらかじめご了承ください。

第5話 疑問

目が覚めた。

「ここは、どこ…？」そう思い辺りを見回してみたけれど、あるのは部屋をしきつている襖一枚と自分の今まで寝ていたベットだけだった。

そしてふと手足を見てみると長い間ロープでしばられていたような赤いアザがあった。それからしばらく昨日のことを必死に思い出すとしているとふいに下腹部に激しい痛みが走った。

「ズキンッ

——っ！！！！？」

そしてその痛みでようやく昨日何があったのかを思い出した。

「そうだ…私、加藤 雄二って人にモデルにならないか？って声をかけられてついに行ってそして…犯されたんだ…」

それを思い出した瞬間いつきに鳥肌がたった。

「逃げなきゃ…」

そう思ったが、時はすでに遅く襖をあけてすぐのところには一人の男が立っていた。

その男は、もちろんあの加藤 雄二という男だった。

『お嬢さん…どこに行くのかな…？』

男は、怪しく笑いながら私に尋ねた。

「別に…」

少し顔を男から背けて声を震わせながら私がそう答えると、男は私の反応を楽しむかのように私の耳元でこう囁いた。

『伊藤 華菜さん…あなたは、もう僕の手の中にいる…逃げようとしたって簡単には逃げられませんよ…』

そう言われて私は、ドキッとした。

「……あなた…どうして私の名前を知ってるの…？」

そう涙目で聞く私に男は、笑いながら私にあるものを見せた。そこ

には、『在学証明書』と書かれていた。

それは、間違えなく私のものだった…。

それと共に男は、ポケットからもうひとつ何かを取り出した。

それは、私が男達に犯された時の写真だった…。

私は、恐る恐る男に尋ねてみた。

「何が目当てなの…？」

そう尋ねる私を見て男は、こう答えた。

『あなたには、これからうちのトップタレントとして働いてもらうよ』

その言葉に私は、耳を疑った。

「あれは、嘘じゃなかったの…？」

その疑問だけが、ただただ私の頭の中を渦巻いていた…。

第6話に続く↓

第5話 疑問（後書き）

作者が、風邪のため更新が大幅遅れてしまったこと大変お詫び申し上げます。そしてこれからもよろしく願います。

第6話 初仕事（前書き）

作者が、用事や指を骨折中のため更新が大幅遅れてしまったことを大変お詫び申し上げます。こんな作者ですが、これからもがんばりますので皆さん何卒よろしく願います。

第6話 初仕事

あれからしばらくして私は、男に脅されて無理やり車に乗せられあるところへと連れて行かれた。もちろん行き先など知らされず目隠しをして手足をロープで縛られ口にはガムテープを貼られた私は、抵抗などできず男の命令におとなしく従ったのだった——しばらくすると目隠しやロープを外された。そしてここがどこなのか確認するためにふと上の方を見た。するとそこには――

《東京ニコニコテレビ》

と書かれていた。そこは、東京一有名な本物のテレビ局だった。

そして私は、男へ案内されテレビ局内のある部屋に通された。

そこには

《伊藤 華菜様》

と書かれていた。

そしてその部屋で用意されていた服へ着替えたあと軽くメイクをしてもらい一時間ほど待ったあと、男に呼ばれたのでついて行きある大きな部屋へ入った。

そこには沢山のカメラやスポットライトなどのいろいろな機材があった。

そして私は、ある男に突然

『今から君をこのカメラでとって> - F o r y o u - T a s t e m e < という雑誌に君の写真をトップ記事として掲載させてもらうからよろしくね』

と言われた。

私は、あまりに突然だったためびくくしすぎて言葉がでないでいたが、そんな私などお構い無しと言わんばかりに写真撮影はスタートし、気付けば露出度の高いビキニを着せられて撮影されるような状況にまでいたっていたのだった…。

そして今思えば、あの時雑誌の名前の意味に気付いて逃げていればこんなことにはならなかったのにとあとで後悔するばかりなのであった…。

第7話に続く↓

第6話 初仕事（後書き）

今回も読んでくださった方々本当にありがとうございました。それから遅くなりましたが、この場を借りてお礼を申し上げたいと思います。桜さん感想をいただきありがとうございました。とても勉強になりました！！他の方々の意見も勉強になりますのでもしよろしければ感想などいただけると光栄です。よろしく願いします。

第7話 屈辱（前書き）

更新は不定期ですのであらかじめご了承ください。

第7話 屈辱

『もつとこつち向いてくれる?』

そう言われて私は男の持つているカメラを睨みつける。

あれから私は、水着を脱がされ今は全裸で撮影されている状態だ。こつなつたのには、理由がある。それはさかのぼること30分前――

――『華菜ちよつといいかな…?』

加藤にそう言われたので私は、彼の元へと向かった。

「何でしょうか…?」

そう恐る恐る彼に尋ねると彼は、冷静に少し呆れたように私にこう言った。

『君…本当に自分の置かれている立場をわかつてるのかい?もつとちゃんと服を自分から脱いで撮影に望んでくれないと困るんだよ。なんせ今日から君は、うちのトップモデルなんだから…』

その言葉を聞いて私は、びっくりして彼にこつ尋ねた。

「服を脱ぐつて…どういふことですか…?」

そつ私が尋ねると、彼は呆れたように笑いながら私にこつ言った。

『そんなこともわからないなんて…君は、本当にバカだね?だつて君の写真が掲載される雑誌は成人向けの雑誌なんだよ?そついう雑誌で服を脱がないなんてありえないじゃないか』

その話を聞いて私は、こう言った。

「成人向けの雑誌なんてそんなの私聞いてない……!!」

そう私が叫ぶと彼は、私にこう言った。

『だって普通そんなこと言わなくてもわかるだろ？だって雑誌の名前が>-For you-Taste me<つまり――あなたへ――私を味わって――って意味なんだから』

その話を聞いて私は嫌々男の命令に従い、こんな形で雑誌を通して私の男たちに汚された体を世間にさらすのであった……。

第8話に続く↓

第7話 屈辱（後書き）

この場を借りてお礼を申し上げます。たくさん感想と評価をしてくださってありがとうございます。これからもっと小説の書き方などを勉強してがんばりたいと思いますので、皆さん何卒よろしくお願いします。

第8話 親友（前書き）

やっと番外編だけでなく本編でも理津が登場します。
では、皆さん第8話をどうぞお楽しみください。

第8話 親友

——翌日……

私は一度家に帰り、その日は普通に学校へと向かった。すると私が教室に着くなり、心配そうに理津が私の元へとやって来てこう尋ねた。

『華菜大丈夫……？昨日学校休んでたけど……風邪……？』

そう聞かれて私は、

「えっ……あーうん！！ちょっと熱っぽかったからね……でももう大丈夫！！」

と昨日あった嫌な出来事を思い出しながら、咄嗟に親友の理津に嘘をついてしまったのだった。

すると理津は、私の言ったことを微塵も疑わず

『そっかぁ……よかった、もう……昨日すごく心配したんだからね！』

と少し頬をふくらませて言った。

そんな理津を見て私がしょんぼりして

「理津……本当に心配かけてごめんね……？」

と言うと、理津は満面の笑みで

『気にしないで』』

と言つて私を慰めてくれた。

そして次の瞬間、理津がハッと何かを思い出したように目を輝かせて、いきなり私にこう言ってきた。

『そうだ！！ねえねえ聞いて華菜！！あのね、今日先輩が帰つて来たんだよ！！』

と…それを聞いて私は、訳がわからなかったので

「センパイ…？」

と聞き直した。

すると理津がすぐくうれしそうに

『うん！！先輩！！ほら、あの華菜の daar い好きな上杉先輩だよ！！』

と言つた。

それを聞いて私が啞然としてみると、理津が私の腕を引っ張りながら

『早速先輩に逢いに行こう！！』

と言つて半ば強制的に私は先輩の教室へと向かわされるのであった…

第9話に続く
↓

第8話 親友（後書き）

理津や上杉先輩について詳しい内容が知りたい方は、ぜひ番外編も読んでやってください。
よろしく願います。

第9話 再会

『失礼しまあゝす！！上杉先輩いらっしやいますかあゝ？』

そう言つて理津が先輩の教室へと入つて行くのを見て、私も慌てて理津のあとを追うように

「失礼します…」

と言つて先輩の教室へと入った。

すると先輩が私たちに気付いて私たちの方へと向かつて来た。そして

『小谷、伊藤、久しぶり』

と先輩は笑顔で私たちに声をかけてくれた。

そして私と理津も笑顔で先輩に

「「お久しぶりです」」

と言った。そしてそうこうしているとチャイムが鳴ったので私たちは先輩に

「「それじゃあ教室に戻らないといけないので…失礼します」」

と言つて先輩の教室から私たちの教室へと歸つて行つたのだつた。そして私は、教室に帰りながらこんなことを思っていた。

半年ぶりに逢えて本当にうれしくて、再会した先輩は半年前よりも

ますますかつこよくなっていて相変わらず優しくて…そんな彼を想う私の気持ちは変わるはずもなく、気が付くと私の頬を涙が伝っていた。

そんな私を見て理津が心配そうに私の顔を覗きこみながら

『華菜！？どうしたの！？大丈夫…？』

と尋ねてきたので私は正直に

「大丈夫…ありがとう…先輩に逢えてすごくうれしかったからつい…」

と言った。すると理津は笑顔で

『よかったね♪また先輩、吹奏楽部に戻って来てくれるといいね！』

と言ったので、私も笑顔で

「うん！！」

と頷き、幸せな気持ちいっぱい教室へと向かった。

今、思えば私はその時が一番幸せだった…。

第10話に続く↓

第9話 再会（後書き）

骨折した指が、痛くて更新するのが辛いですが…なんとかがんばりたいと思いますので皆さんこれからもよろしく願います。

第10話 幸せな時（前書き）

小説の更新は、不定期ですのであらかじめご了承ください。

第10話 幸せな時

——放課後

私はいつも通り理津と一緒に吹奏楽部へと向かおうとした。が、今日は残念ながら理津は家の用事があるため部活に来れないので私は珍しく1人で吹奏楽部へと向かった。

「こんにちわあゝ!!」

そう言つて吹奏楽部の部室（第2音楽室）へ入ると私の大好きなあの人がいた。

その人はもちろん、上杉先輩…彼は私が部室に入つて来たことに気付き私に笑顔で

『こんにちわ!!』つて言つても朝も逢つたけどね（笑）それから今日からまた俺が、吹奏楽部の部長だからよろしくね!!』

と言つた。それを聞いて私は、とてもびっくりしたけれどそれ以上にうれしくて思わず

「本当ですか!? 私、先輩が吹奏楽部に戻つて来てくれて本当にうれいんです!! ありがとうございます!!」

と言つてしまった。そしてそう言つたあとで私は、すごく恥ずかしくなり顔を真っ赤にしてうつむいてしまったのだつた。

すると先輩は、少し照れながらうれしそうに笑顔で

『そっか…俺もまた伊藤と話せてうれしいよ!! それから…吹奏楽部に戻つて来た俺のことを心から歓迎してくれて本当にありがとう』

と言ってくれたのだ。

それを聞いて私は、本当にうれしくて今まで以上に先輩のことを好きになるのだった。

そして私は、彼女になりたいなんて贅沢は言わないからこれからもただの部活の先輩と後輩という関係でもいいから、この幸せな時がいつまでも続くことをただただ願うのであった…。

第11話に続く↓

第10話 幸せな時（後書き）

やっと第10話までいきましたが…予想以上に長い小説になってしまいそうです…皆さん長い小説ですみませんが、どうかこれからもお付き合いいただけますようよろしくお願いします。

第11話 永遠の愛（前書き）

小説の更新は不定期ですので、あらかじめご了承ください。

第11話 永遠の愛

—— 数日後

今日は、先輩に

『部活のあと桜ヶ丘公園の桜の木の下に来てくれ』

と言われたので、私は部活の後桜ヶ丘公園の桜の木の下へと向かった。

しばらくすると私は、桜ヶ丘公園の桜の木の下へと着いた。

だがそこにはまだ先輩の姿はなく、あるのはもうとつくに桜の花が散って葉っぱ一つない寂しい桜の枯れ木だけだった。

その桜の木をぼんやりと見ていると私はふと切ない気持ちになり、こつつぶやいた

「先輩…早く逢いたい…せっかく東京に帰って来てくれたんだもん…後輩としてでいいから少しでも長い間先輩と一緒にいたいよ…」

と1人でたそがれていると遠くから

『伊藤—————!!』

と私のことを大声で呼びながらこつつちへと向かって来る先輩が見えた。

それで私はふと我にかえり、先輩に軽く会釈をした。
すると先輩は、息を切らせながら

『ごめんね…だいぶ待った…?』

と心配そうに私に尋ねてきた。
それを聞いて私は

「いえ…大丈夫です…」

と言うと先輩は

『そつか…ありがとう（笑）そういえばいきなり呼び出してごめんね…その…』

と何かを言いにくそうにしてるので私が

「どうかしましたか…?」

と尋ねると先輩は真剣な眼差しで私に

『伊藤…よかったら俺と…付き合ってくれないか…?』

と言った。

それを聞いて私は唖然としたと、同時に先輩が私を好きになってくれたのが嬉しくて仕方がなかった。

そして私たちは、桜の木の下で永遠の愛を誓いあったのだ…。

第12話に続く↓

第11話 永遠の愛（後書き）

話の展開がコロコロ変わってすみません…これからも頑張りますのでよろしくお願いします。

第12話 初デート（前書き）

小説の更新は不定期ですので、あらかじめご了承ください。

第12話 初デート

——翌日

今日は、土曜日で学校がないので私たちはデートをする約束をしていたのだった。

待ち合わせ場所はもちろん『桜ヶ丘公園の桜の木の下』。

待ち合わせの時間は10時。でも私は、初デートに何を着て行っ
ていいかわからず服選びに時間がかかったため10分遅刻してしまっ
たのだった…。

「上杉先輩！！すみません…待たせちゃって…せつかくの初デート
なのに…」

と、私が涙目で言うと先輩は

『気にしないでいいよ（笑）今日は初めてかわいい伊藤の私服姿見
られたし…』

と笑顔で少し照れながら言った。そのあと笑顔で私のことを優しく
抱き締めながら

『あと…俺のこと

「上杉先輩」だなんて呼ばないで…俺たちもう恋人同士なんだから
…これからは俺のことは

「涼」って呼んで…？そのかわり…俺も伊藤のこと華菜って呼んで
いいかなあ…？』

と耳元で囁いた。それを聞いて私は全身が性感体になってしまった

ようで

「んっ…あっ…」

といやらしい声をだしてしまった。するとそれにびっくりして先輩が今度は真剣な眼差しで、私を強く抱き締めながら

『華菜…そんなかわいい声だしちゃダメ…変な奴に襲われたらどうするの…!!…それとも華菜は…今ここで俺に襲われてめっちゃくちゃに壊されたいのかな…?（妖笑）』

と言われて、私は真っ赤になって顔を左右におもいつきふった。……まあここで先輩にめっちゃくちゃに犯されるのも良かったかな…?と密かに思いながら…。

そして私たちは、映画館へと向かったのだった…。

第13話に続く↓

第12話 初デート（後書き）

この場を借りてお礼を言わせていただきたいと思います。WISPさん感想&評価ありがとうございます。それからWISPさんの疑問についてですが…雄二に『親に友達の家に泊まって朝帰ると言え』と華菜が脅されるところを私のミスで消してしまっていました…。本当に申し訳ありません…。こんな私ですが、皆様どうか見捨てないであってください…（泣）よろしくお願いしますm（<|>）m

第13話 虜（前書き）

祝！！

10000人アクセスありがとうございます！！

皆様本当に読んでくださってありがとうございます！！（＜|＞）

これからも頑張りますのでよろしく願います。それでは第13話をどうぞお楽しみください。

第13話 虜

桜ヶ丘公園からしばらく歩いて行くと映画館に着いた。

今日私たちが見る映画はカップルに大人気の恋愛映画で中に入ると、噂通りたくさんのカップルがいた。

それを見て私が

「すごいですねえ…カップルがいっぱい…」

と言うと涼くんが

『うん、そうだね（笑）あと俺、彼女に敬語使われると嫌だなあ…』

と言った。それを聞いて私は必死に敬語をなおすよう気をつけると約束したのだった。

そうこうしていると映画が始まり私たちは見入っていた。

そしてクライマックスの恋人同士がキスをするシーンにさしかかったその時、涼くんにいきなり

『華菜…こっち向いて』

と言われたので私が

「え…？」

と言って涼くんを見たその瞬間……

気づくと私たちの唇は重なりあっていた…。

その状況にびっくりして私が呆然としていると、いつしか私たちの唇は離れていた。

そして涼くんが私の耳元で優しくそつと

『華菜…甘くておいしかったよ…ありがとう。次は…もっとじっくり味あわせてね（妖笑）』

と言った。それを聞いて私はとても恥ずかしくなり顔を赤らめつつむいてしまったのだった。

そして大好きな人との優しいキスの余韻でしばらく私の思考回路は停止し、熱でもでたかのように頭がボーッとしていたのだった。

そして私は自分でもわかるくらい涼くんの魅力に酔わされて虜になり、この愛にどんどん溺れていくのだった…。

第14話に続く↓

第13話 虜（後書き）

今回は初めて題名が一字だったのですが『虜』にするか『とりこ』にするかとても迷ったあげく『虜』にしました。『とりこ』だとかわいいけど色っぽくないかと思ったので…（笑）まあそんなこんなでこれからも頑張っていきたいと思います！！それでは、また

第14話 着信（前書き）

大変遅くなりましたが、明けましておめでとうございます。今年もこんな作者ですが、何卒よろしくお願いします。小説の更新は不定期ですのであらかじめご了承ください。

第14話 着信

映画館をでて、私たちはそろそろお腹がすいてきたので近場の喫茶店へと入ることにした。

そしてふと時計を見ると時刻はもう一時を過ぎていた。そりやそんな時間ならお腹も減るはず。なぜなら華菜は服選びに夢中で朝食を食べるのをすっかり忘れていたからである。つまり華菜は、今日の今まで食べ物は何も口にしていなかったのである。

そしてそんなことを思っていると料理が運ばれてきた。

華菜が頼んだメニューは、サーロインステーキの200gのライス&スープ&サラダの満腹セットである。

それに対して涼はと言うとミートスパゲティーだけである。

それを見て涼が苦笑いしつつ

『なんか…俺たちって頼んだメニュー逆っぱいよな（笑）ほら、だって華菜のほうが小柄だしそんなにいっぱい食べそうにみえないじゃない？（笑）』

と言われたので私は

「そうかなあゝ？私、食いしん坊だからあゝ（笑）」

と言い、二人で笑いながらたわいもない話をして楽しみつつ料理をじっくりと味わって食べていた。そしてデザートを頼み今から食べようとしたその時、ふと私の視界にケータイのディスプレイが目に入った。

そして特に何か連絡がないとわかりつつもいちようケータイを開いて本当に連絡がないか画面を見て確認した。するとそこには…

《着信20件》

と表示されていた。

それを見て私はびっくりしたと同時にすごく怖くなった。

まさか振り込め詐欺か何かじゃないかと思いきなり誰からかかってきたものか確認するのを一度戸惑った。が、もし家族や友達からの大事な用事だとダメなのでいちよう確認することにした。

そこには……

《加藤 雄二》

とあった。

そう……私のケータイにアドレスがあるはずもない彼から……

第15話に続く↓

第14話 着信（後書き）

今回も読んでくれた方々ありがとうございました。それでは、また第15話で…。

第15話 呼び出し（前書き）

小説の更新は不定期ですのであらかじめご了承ください。

第15話 呼び出し

そのあと私は、しばらく携帯電話を持ったまま固まっていた。すると涼が心配そうに

『華菜どうしたの…？何かあった…？』

と聞いてきたので私は

「えっ…ああ、うん。ちょっと友達から着信はあったから電話してくるね…！」

とぎこちない笑顔をつくりとつさに嘘をついて女子トイレへと駆け込んだ。そして私は恐る恐る彼に電話をかけた…。しばらくして呼び出し音のあと彼が電話にでた

『もしもし…華菜…？俺だよ。言わなくてもわかるね』

彼にそう言われ、私はたくさんの疑問をぶつけた

「はい…加藤さんですよ…？どうして私の電話番号を知ってるんですか…？それにいきなり何件も電話するなんていきなりなんですか…？」

そう言うと加藤は

『そんなことはどうでもいい。いいから今すぐ俺のところへ来い。場所は《花ノ宮北公園》だ。わかったな？』

と半ば強制的に要件だけ伝えて電話を切ろうとするので私が

「待ってください！！いきなりなんですか呼び出して！！」

と抗議すると加藤は

『仕事だ。もし来なかったら…わかってるな…？』

そう言つて加藤は電話を切った。

そして私は、女子トイレをでて涼の元へと戻つたすると涼が私に

『大丈夫…？なんだか顔色悪いけど…』

と言つので私は

「大丈夫！！なんでもないよ…それより私、急用思い出したから悪いけど先に帰るね！！」

と言つて涼の”送つていこうか？”と言つ問いかけにも”大丈夫！！”と適当に返事をして加藤の元へと急いだ。

そつ…まさかあんなことになるとは思ひもせずに…。

第16話に続く↓

第15話 呼び出し（後書き）

いろいろ考えてるうちに更新が遅くなってしまいました（汗）もっと早く更新できるよう頑張りますので皆様どうかこれからもよろしくお願いしますm（＿）＿（＿）m

第16話 到着（前書き）

小説の更新は不定期ですのであらかじめご了承ください。

第16話 到着

—— 30分後 ——

私は先ほど加藤に電話で来るように指示された場所《花ノ宮北公園》へと着いた。が、そこに加藤の姿はなくあるのはベンチと枯れて葉っぱがひとつもない桜の木だけだった。

そして一時間ほど待った頃、私のケータイが鳴りディスプレイには

《加藤 雄二》

と表示されていたので私は慌てて電話にでた。

「もしもし… 加藤さん、今どこにいらっしゃいますか…？」

そう私が尋ねると彼は私の言ったことが聞こえていなかったように

『そこから左側に見える男子トイレの一番奥に入れ』

とだけ伝え電話を切ってしまった。

そして私は人目を気にしながら、恐る恐る男子トイレの一番奥へと入った。と、同時に加藤によってトイレのドアが閉められてしまった。

それを見て私は咄嗟に開けて！！と叫んだが努力のいかいも虚しく、加藤の手によって裸にされた私はM字開脚をした状態で拘束されて

しまったのだった。

そして私は

「イヤ！！やめて！！」

と必死に懇願したが彼はその姿を見て嘲笑うかのように冷たく

『そんな大声を出す与他の人に華菜が犯されてるのバレちゃうよ…？（笑）』

と言い、彼は私の秘部にピンクローターを勢いよく挿し込んだ。そしてそれは次の瞬間、ブウイイイイーン………という音をたてて私の膣内を暴れまわり私の体はビクンツと弓反りになって、私は快楽地獄へと飲み込まれていくのだった……。

第17話に続く↓

第16話 到着（後書き）

今回も小説の更新が遅くなってしまってますみません！（<―>）
これからも頑張りますのでこんな私ですが、どうかよろしくお願い
しますm（――）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6585c/>

有能な私

2010年10月8日14時13分発行